



この秋、かねがね実際にその姿を見たいと思っていた建物を訪れることができた。中国山西省にある懸空寺という深い渓谷に面する絶壁に天空高く張り付いた建物である。対岸に到着し、崖面の大きさに圧倒されながら、かねて用意の望遠レンズでその姿を凝視した。なんとという奇観だろう。現在は谷の深さは60メートル程になっているが、創建当初は100メートルの高さにあったという。

この懸崖の堂宇は北魏後期（471～523）了然和尚の創建とされ、1400年の歴史を有する。仏教、道教、儒教の三教帰一思想を表現した由来で、仏祖釈迦牟尼、道教鼻祖老子、儒家始祖孔子の3像を中心に堂内に80余の彫像が祭られている。現在の建物は明清時代の遺構という。長年にわたって、改修、増設されてきたものらしく、現在は10棟を数える。遠望するだけと思っていたら、堅牢な構造らしく昇殿できるという。見れば、大勢の観光客が蟻の行列のように這い上がっているの

が見える。1メートルに満たない通路を辿って、内部詳細もつぶさに見ることができた。

千仞の谷を望む絶壁に窪みがあり、そこに仏像を安置し、その外部に拝殿を取り付けたという構造であるらしい。

岩肌に穴を彫り込み、梁を差し込んでキャンティレバーとしてその上に床を張り、屋根をかける。梁を支えるつかい棒のような木柱はあまりにも細く見えるが、耐震性をも考慮した力学、美学、宗教を融合一体化した類稀なる芸術品であると地元の解説書は述べている。

このような建物の発想がどうして生まれたのだろうか。雲崗石窟寺院あるいは敦煌・莫高窟と同じ発想と構造ではないかと思いついた。はるか人里離れた山岳地帯の天空に天上界を想像し、隠れた仏の姿を彫り現す、或いは仏像を安置する。建物に見える構造はこの天堂の差掛け屋根ともいべきものであるという考えに帰着して納得した。

